

聖書

—

字を書いていく。文を構想しているのではない。言葉が神であるというの言葉が存在の全構造というようなものに位置しうるからであろう。いえ、その時、宇宙という全存在の構造が生まれるということかも知れない。それがうまい言葉、あるいは（合理性）。

“人は、パンだけで生きるのではなく、神が言うあらゆること生きる。”

というのを説明して行くのが聖書なのだろうか。説明という不幸あるいは説明という恐るべき雑用。いえ、いずれにしても存在するものは悲劇の上に成立してくる。物事があるのは不幸を土壤とし、あるいは不幸の展開が物事なのであろう。

人という物事が生まれるのは不幸によって、とっている不幸。不幸が（存在）する。そこでは言葉は存在となって神につらなっている。不幸は、多分、素直な性質だから。

この世には不思議な一運命というものがあるらしい。聖書が読め

渡部和雄

ないという存在。ふとしたら日本人はまだ文脈というものを作ったことがないのではないか。ここでは言葉は社会の構成部分でしかない。文脈のない言葉を話していくと、（人生）に会うことがない。

文学や芸術の研究などというのは、学校経営の雑用の中に生まれ、同種の雑用にすぎない。雑用であれば徒党を組む。だから研究というのは政治に似て存在する。文学や芸術の研究が政治に似ているのは、狭い日本全土が政治の構造であるような特質によっている。

誰に話しかけることも、誰に連絡することもなくなっている。天地が悄衰し、社会の骨組みが悄衰している。私は恥ずかしくなり、私は囚人のように自由になつた。

理性は神からやつてくる。言葉を探しては神、彼、ギルガメッシュは言葉を思い出す。思い出すのが言葉なのである。

ウトナピシュティム

ウトナー古いシユメールの太陽神

ヘブライ語ーネフェシユ

アニマ・ヴェージェタティヴァ

を（植物の魂）と云い

生命の原理を意味する

思い出すー言葉ーウトナピシユティム

そう、植物の魂のようなものが、思い出して、語る〈言葉〉というものがあつたらしい。人が気づくのは神の働きである。そこでは神が話している。(ソコ)、そこでバカにされて、その精妙さ故に、私は神によって(自由)を与えられている、植物。(自由の在り処)。そこには、昨日と明日の記憶がない。(自由)が時間を在らしめる。時間は神の中の自由(に成立する)

責められた不眠が、原稿(言葉)を書かせるようなもの。

何かを話していくのではなく、そこから湧き上ってくるように。

言葉が何かを恋しているように、話が生まれる。普通は、恐怖に囲まれていて、口は閉じられたままになっている。

二

たった一つ、聖書は読まれるから本なので、人に説明してはならない。説明というのはブルジョアの生活性である。そこでは感情が排除されるようにして話が構成される。

言葉が人間たちの連絡記号のように(教育)されはじめたのは、法治国家、そして産業社会が成立してからである。言葉は社会生活に隷属した。そのうち、世界には言葉が芸術でありえなくなろう。

『ブルトマンと共に読むヨハネ福音書』上、中、下 白井さく

言(ことば)の先在

一ー1 はじめに言があつた。言は神とともにあつた。2 彼ははじめ神とともにあつた。

〔言があつた〕とは、言は時と世に無関係な存在であつたということ。ただ神との関係において、言は存在した。今も存在している。未来にも存在する。

〔言〕は時と世とに制約を受けずに存在している。それで時と世とに制約を受けているものは、神に創造されたもので、言とは本質的にちがっている。つまり言はまったくこの世から取り除かれた絶対の彼方の存在である。(上の18頁)

と、私は二月三日、大寒の終りの朝に写している。晴れた空と冷気と頭には何か関係があるらしい。

イエスの言葉によって、言の本質を知るのである。彼の啓示においてだけ、神はそこに在し給う。啓示に接した者は、実に神を見ただのである。(上 20)

言葉が存在を作った(が)、存在は必ずしもこの世の個々の形ではなかつた。それは名前だったのかも知れない。(逆算して行くと、現在の形、在り様から、その向うに、あの言葉が抽出される)

人は名前を覚えることはできるが、顔形などを覚えることはできないのではないか。そう浮世は人の記憶にはならない。

吉本隆明やシモーヌ・ヴェーユの、一と多の矛盾、言葉と存在の矛盾は、言葉は存在を作ったが、それはこの世の形のことではないということであろう。その証拠が、今、存在の向うに(言葉)が見えることである。存在が言葉に似ることにはできる。そこは存在の祈り、向うへの意志による所に於てである。優れた形というのは、必ずこの世の存在の犠牲によつていゝ。

形や色が成立したのは、なんと人の心と人の心が集合した故であろう。いわば形や色の識別は社会的、教育的成果である。仲のいい、

心の合った二人が私を不安にする。シットみたい。そう、人というのはそうして生きている。人と生きていることは同じみたいだ。人は形に制約されている。夫婦や親しい友人や、それらは支配構造に似ている。〈私〉は説明できない。説明できない〈私〉。

三―八 風(ブニューマ)は心のままに吹く。その音は聞こえるが、どこから来てどこに行くか、あなたは知らない。霊(ブニューマ)によって生まれる者もその通りである。

神が啓示を示されるのに時がある。それは啓示を受けられることができる時である。その時には限界があつて、その時を逸しては、ふたたびその時は来ない。それで啓示を受ける者に責任がある。啓示は時間を超越して把握される一般の真理ではない。あるいはどんな時にも役立つ教理でもない。現在すべての時に、その人に真理を指し示す啓示者の言葉に、人は出会うのである。(中 40) 〈それが時だ〉といつてみて、「啓示は」「現在すべての時に」「人は出会うのである」という文脈が面白い。

九―37 イエスは言われた、「あなたはもうその人に会った。いや、あなたと話しているのが、その人だ」。

〈あなたは彼を見た〉は現在の瞬間。(中 89) というのも、愛情のような懐しさだ。女は美人だったのかも知れぬ。光と暗黒とは人間の理性では決められない一つの啓示である。したがって自分が光のなかに入れられていなければ、見えることと見えないことの判断はできない。(中 90)

八―25 すると彼らが言った、「あなたはだれですか」。
28 そこでイエスが言われた、「あなたたちは人の子を挙げた時にはじめて、わたしはある」ことを知るであらう。

この世から姿を消した時、〈知る〉。どうしてなのか、処刑というこの世からのひとり、完成した孤独、ひとりというないもの、神に似ている。我は〈この世〉というものに勝った。相対性・部分性を越えた。

十一―18 だれもわたしから命を取り上げることはできない。わたしは自分で捨てるのである。わたしにはこれを捨てる権利があり、ふたたびこれを取る権利がある。この命令をわたしは父上から受けた。

命令？ 在り様、筋道ではないのか。聖書とは何かの文脈なのだろうか。心の。心はわたしより父上(神)に通つている、という文脈か。人は人を信じることができないうようにできていて、その分だけ人を軽蔑している。(それも誰も知らない)

人が神以外のことに関心がなくなると―言葉が神への筋道以外のものでなくなると、心の文脈というのは神からの筋道のようにある。この世という正義は〈心〉に沿うことが下手である。利口で器用な女のようなのである。

信者が啓示を知るのには、まず啓示者が信者を知っておられた、という根拠がある。さらに、イエスを啓示者にされたという神のご行動にもとづいている。したがってこの相互関係は神によつて造り出されたので、だれもその関係を打砕くことはできない。(中 141)

と、この文脈はまた、言葉が神への筋道であるという基準を聖書においてもいい、一切はイエスの言動にあるということも示している。イエスの行ないによつて、父上の愛が啓示されるから、彼は啓示者なのである。(中 144)

として、言葉（神への筋道）は（愛）を語っている。

もつとはつきり言うと、イエスの死が、父上の愛の啓示であると言えぬ。（中 144）

この世からの死が（愛）の啓示。この世からの死が神への愛。愛は言葉が私にやってくる。私がこの世で死ぬこと。この世の形の向う側。そして言葉とは（良い）ものである。

11-14 わたしが良い羊飼である。わたしはわたしの羊を知っており、わたしの羊もわたしを知っている。

芸術というのがある病気の形なのか、病気の終った形なのか。

五月神の月、四月からの長い風邪。葉ひと睡眠、不気味な夢。

ひっきりなしの咳、とめない咳、急救外来、タクシーの渋滞。にがい口内、内臓までになくなっていくようだ、荒れた胃。点滴。

薬が体を支配し、薬の特異な性質が感覚となって体内にわたっていく。絵が薬の紛のようになる、陶器が薬の紛のようになる、文学であつた言葉が薬の紛のようになる。

ながい昏睡から覚める日（があつたとして）、私はもう文学も絵も陶器も魅力としては感じなくなっているだろう。

三

信者の終末的な存在、つまり救いの完成は光として特色づけられる。それで光は終末的な命—永遠の命—と同じ意味になる。（上

23）

1-5 この光は暗闇のなかに輝いている。しかし暗闇は光を自分

のものとしなかった。

創造物の存続は、創造されたもの自身に力が内在しているからではない。（言にある命によつては生存が続けられる）のである。

（上 22）

啓示を受ける、というのは生まれ変わった人に、示される真理である。したがって、3-3、5-6に語られている新生が前提される。（言が肉となつた）というのも、天上の一つの出来事で、人間には奇跡としてしか理解できない。（上 34）

彼は先在の言であつて、神と同質の方である。そのことは肉となつても決して損われることなく、彼のなかに存在している。（上 34）

サタンがでてくる。（これらの国と、その一切の権力と栄光の全てをお前にやろう）というの、国と権力と栄光はサタンのもの、この世の生活はサタンの現象ということになるだろう。

15-25 しかしこれは彼らの律法に「彼らはゆえなくわたしを憎んだ」と書いてある言葉が成就するためである。

イエスのわざに対して、この世の憎みが起つたのは神のみ心による。（彼らの律法）とは聖書のことで、引用は詩篇三五・19、同六九・4である。（ゆえなく）は、ここでは（不当に）（理由なしに）の意。この言葉の奥に（彼らは自分の行ないについてその理由を考えることなしに）させられた、という意が含まれている。つまり神と啓示者に対する行動に、はつきりした理由を見出すこともなくさせられる。自分の心の態度が自覚せずに明るみに出されるのである。

ここで罪とは何であるかが明らかにされる。罪とはこの世の人々の間でなわねられていることではない。したがって、この世の人々

の間では道徳的に正しく、罪がないと自他ともに許しても、それで罪なしと判断することはできない。また、この世の人々から罪人としての扱いを受けても、それがその人の罪を決定する基準にはならない。罪の罪たることは、ただ啓示者に対する心の態度である。(下 114)

と、雨が降っているので、(人の説明を)長々と引用している。

九一三 イエスは答えられた、「この人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。ただ、神の御業がこの人に現われるためである。

というのは神の御業はこの世の不幸に似ている。この世が疎外するもののこと？

奇跡の対象になる人やこの出来事自身に興味があるのではない。

父上からの委託によってされるイエスの固有なわざに興味がある。(中 71)

と、ここで「この物語は最初からシンボリックな意味で語られている」という表現に注意しておこう。

九一十 すると人々がたずねた、「では、どうして目があいたのか」。

11 答えた、「あのイエスという方が、泥をつくってわたしの目に塗りつけ、『シロアムに行つて洗いなさい』と言われた。そこで行って洗うと見えるようになったのです。12 人々が「その人はどこにいるのか」とたずねた。「知りません」という。

(こう言つて地に唾をはき、唾で泥をつくり、その泥を盲人の目に塗つて)というのは習俗的なことであろうから、(奇跡)の条件ではないだろう。で、

彼は肉眼ばかりでなく霊眼も開かれて、完全に見えるようになった

たことを知つたのである。(中 76)

もし、肉体的な、社会的な現象で(奇跡)があるとしたら、そこから(心)あるいは(考える)ことは失われてしまふのではないかと。盲目、目明きは相対的關係でしかないから、それは奇跡よりは原則であろう。相対性部品の交替なら、水やブドウ酒や、盲人や目明やなら、(我はこの世に勝つ)ことが不可能なのではない。この世の存在は相対性部品として創造されたのだから、その中、貧乏が金持ちになり、王が奴隷になることも奇跡となるのではないか。

奇跡はこの世の關係的現象なのか。マイナスをプラスに換えること。なら、この世は全部奇跡なのではないか。

ところがまわりの人々は、イエスの働きを見ながら、これが啓示の出来事として見るができなかつた。それが啓示を受けられない人々の不信の姿である。それでいろいろ議論しなければならなくなつた。信仰と不信との対照が絵のように描写されている。(中 76)

(イエスの働き)、この世の相対的現象が(啓示)なのであるうか。お前は何を言っているのか、と吹きくる風が私にいう。面白いことに、この白井氏に同じようなことを渡辺正雄氏が云われている。

単に目が見えるようになったというだけではない。「神のみわざ」を「神のみわざ」として真に尊び、本当のことは何でも自分の責任で言う自主独立の人へと変えられたのである。……

生まれつきの盲人が身体的に盲目なのは、実は「本人が罪を犯したのでもなく、また、その両親が犯したのでもない。」真に問題にしなければならぬのは、それとは別の、神に対する人間の本来的な盲目性、したがつてまた、人間自身(自己と他人)に対す

る本来的な盲目性である。(『キリストに出会う』)

ああ、〈奇跡〉は私の文脈になりそうもない。

見えない人(盲目の人)が見えるようになるとしたら、それは両極点をなしているこの世の状態である。(見えない)はこの世に作られたものである。そして〈見えれば〉それは相対性現象でしかないが、この話をしてるのは〈真理〉ということなのだから、見えるのは、この世の存在論的、終末の様相をいうのかも知れない。

呪われた〈この世の祝宴〉に酒を充たすのが、一体何の奇跡なのか。奇跡がこの世と結婚した。奇跡とはこの世への媚薬なのか。

もし、考えるということ、文脈というものが可能だとしたら、奇跡だつて、この世に続いているもの、極度の地点から成立してくるはずのものでなければならぬ。極点の瞳に映るもの、極点の脳裡にかかる映像ではないのか。それはない世界、神の力という世界の構図である。いわば存在しているものの欠落に成立してくるもの。

十一—40 イエスがマルタに言われる、「信ずれば神の栄光が見られると、あなたに言ったではないか」。

したがつてこの場合、祈りの姿勢をとられても、その祈りに特別な意味があるのではない—ただイエスの祈りによって、神がイエスをもつて奇跡をなさつたので、この奇跡は神のみわざであつたと、人々に悟らせるためであつた。(中 185)

イエスの祈りによって証明されたことは、終末において啓示者を受け入れた人々に、父上と啓示者との関係と同じ関係が実現するのを約束されたのである。(中 185)

以上の意味で41—42に記されているイエスの祈りは、もはや人間的なものではない。彼の祈りは終末において、すべての人が祈る

ことができる祈りの模範である。……信者のひとりひとりが神から遣わされた啓示者となる。……

終末に実現される信者の希望はここにある。それは信ずる者にイエスが復活を賜わるからである。しかもそれは今、実現しているのである。(中 186)

〈復活〉(死の相対性)〈今〉〈実現〉している。それが〈終末〉の〈祈り〉の内容。今、生きていることと復活はひとしい。

十一—43 こう言つたのち、大声で「ラザロ、出てこい」と叫ばれた。

ここでは〈ラザロの復活〉という奇跡を記したのではない。啓示者を受け入れた者は、みんなイエスの命によってラザロのように復活するのである。その奇跡を経験した者は、ただイエスの力によって復活させられたのではなく、神の力が啓示者によって自分に及んで造り変えられたことを知るようになる。(中 188)

ない、ない、ないと白井氏の語調が続く。この世から造りかえられた自分が復活である、というのはこの世に生きられない極度の点から、それでも生きているのを感じて〈復活〉というのではないか。

ここは祈りの秘義ともいふべき所であろう。(中 186)

とは言つても、この世は相対性だから、すべては部品で、生と死の関係のようで、その故にこの世に支配的性質があつて、その支配の構造からも(政治だから)もつと末端に生きていような極点からは、生活というこの世への復帰が〈奇跡〉に見えるのではないか。

歴史の中で、〈今〉は死んでいる。終末というの歴史にならない、極北の地から生活への途上で、〈心〉だけが今でありうる。

そう〈考える〉ことが今である。多分、それが終末論らしい。今

は決して相対性部品とはならない。

歴史の発展というのはより細分化された相対性である。極端、死こそ、この世のもっとも歴史的な観念である。死を疎外する情熱。歴史に対するものは、死という極度の負、自己閉鎖性である。そこが〈心〉というものであるらしい。私の〈心〉というのは折つて神と通ずるものというより、マイナスの定点であるらしい。いわば歴史の底辺（それはない）のようなものである。

「なおりたいのか」(五—一—13)

しかし、人を癒すことのできるこの言葉を発せられることは、その発言者たる神の御子を十字架へと導くことなしにはすまされなかつた。彼がこの言葉を発せられるならば人は確かに癒されるが、それと共に、神の御子御自身は十字架への道を一步進まれることになるのであつた。それゆえ、彼は最初から、十字架を覚悟のうえで、「なおりたいのか」との言葉をかけられたのである。(渡辺正雄『キリストに会う』)

(なぜ? とはつまづきなのか、病はこの世の死であり、生活とは神の子の死であれば、病(法治外)は神に似ている)

……実際、以上に続いて……イエスはこのことゆえにユダヤ人たちに責められた。(右同)

病人(ベテスタの病人)こそ歴史における極点ではなかつたか。「起きて、あなたの床を取りあげ、そして歩きなさい」。

どこに、この世の相対性に? ここが彼(私)の定点であるのに。〈奇跡〉は私に、考えることになじまない。考えることは神への筋道、言葉は神への道。考えることは、〈ない地点のリァリテイ〉。

神の子はこの世への回帰(健康)を思うのか。

十二—23 人の子が栄光を受ける時がついに来た。

24 アーメン、アーメン、わたしは言う、一粒の麦は、地に落ちて死なねば、いつまでもただの一粒である。しかし死ねば、多くの実を結ぶ。

種は死ななければ、実を結ばないように、イエスの栄光への道も死によらなければ成就しない。この言葉は特別なパラドックスである。それは十字架の秘密ともいうべき言葉である。イエスは人の子として地上生活をされ、十字架の死によって地上のものから完全に解き放たれて、朽ちない永遠の栄光の姿に変えられるのである。先在の「言」が神と共におられたように、まったく神と同じ姿になられたのである。(中 213)

でも、私の文脈にはパラドックスも従つて栄光という封建性もない。それは奇跡が思考にならないことに似ている。すべては、死というマイナスの定点だけで充分ではないのか。相対性ではなくて、この世からのいじめ、死の場所である。死と神は似ている。

〈言の先在〉か、いえ、心から神への筋道もあるのではないか。心の底を探して行く、心の欲する所を探して行く、行きつく神。

心の底を探し出そうと思つたら
いじめられて、逃げて、逃げて、
ついの底点

いじめられた〈心〉

逃げ口の無いひとり

いじめや憎しみは心にならない

それは根拠を失っている

この世のドジや不細工や

バカや田舎者や

それらをいじめる、政治

その（心）が（主語）、聖書（同格）を読ませるのではないか。心と聖書は同一に活動して、創造的である。

十二―28 「お父様、あなたの御名の栄光を現わしてください」。すると天から声がひびいた、「わたしはすでに栄光をあらわした。また栄光をあらわすであろう」。

栄光とは別名、極点のマイナスが、他人（政治）によって与えられる理不尽のことなのか。そんな愚かしさが歴史の性質だから。生活と歴史によって定年化された（死）が与えられる理不尽。

ついに一人残らずの人が「ラザロ出てこい」と叫ばれたイエスの霊の力によって、新しい命によみがえる日のあることを約束してくださった。（中 188）

という意味かも知れない。この世で（新しい生命によみがえる）。

（考えること）（話すこと）（書くこと）は男女の性などからは生まれない。疎外の極、限界の果てに（新しい生命）が生まれる。それはひとりだけの、従って（ない世界）である。そう、たったひとりが読まなければ、聖書は話にはならないだろうし、ひとは存在しない。みんな読んでいるから、聖書は世界的な読物らしい。

奇跡というのは考えない方がいい。ただこの世の果てのような所があつて（なくて）、そこから奇跡が見えるようなのだろう。死が

ふと生きているように見えるカラクリ。死がこの世に触れる憧れ。だから、この世に触れてみると、心の退屈から死んでしまう。

面白いことに、必ずそんな人がいるのである。

十三―21 こう言ったあと、イエスはひどく興奮して、はつきりとかう言われた、「アーメン、アーメン、わたしは言う、あなたたちうちの一人が、わたしを売ろうとしている！」。

27 ユダヤがそのパンを受け取って食べると、その時、悪魔がユダヤに入った。そこでイエスがユダヤに言われる、「しようとしていたことを、さっさとした方がよからう」。

人を殺す者、殺される者はサタンである。心というひとり（極端の定位）においては多分、この世はサタンの構造なのである。

十七―1 目を天に向けて言われた、「お父様、いよいよ時が来ました。どうか子に栄光を与えてください。子があなたの栄光をあらわすために。」

心、行きついた定点、それが人の栄光。ひとり―神（なくて存在するもの）の栄光をあらわすために。人間に於ては極点の定位は殆ど絶対である。ユダがパンを食べた時にサタンが入り込んだというよりは、ユダの倫理力がサタンなのであろう。この世では、すべての力は邪悪としてしか成立してこない。

芸術（言葉の芸術も）は、そこから代金を引いたものとして存在している。芸術家の生活が経済的（金）であるような犠牲によって、芸術は出来上っている。多分、芸術家の生命のようなもの。

この世では、すべて集合した思ひは悪魔（悪意）である。そこで文というのは人間の夢遊のようでしかない。さて何かがすぐれているとして、そこには必ずある犠牲が隠れているが、両者の構造はひ

としい。だからこそそれはカラクリである。それは〈心〉に似ている。

四

この世で人に何か役立つものがあるとして、それが〈不幸〉ぐらゐのものだとして、イエスは何と都合よく貧しく生まれたことか。生まれで二十年で成人式、保育期間、そこから徐々に死んで四十歳。十八歳なら折り返し三十六歳で死ぬ。これが貧しさの典型。

聖書ほど〈栄光〉をほしがった本もない。極度の貧しさは、一番よく心に似ている。その心は面白いもので、この世から憎まれ、歴史から排除され、戸籍もなくなると、却って貪欲になつて、一切を所有しようとする。それはこの世のもの部分性にはどこまでも納得しないことである。すべての果てまでつまらなくなる。この人生をくらいつくすことを正義とおきかえる。際限なく正しさを求める。正しさは求めれば求めるほど、〈私〉を失わせる。〈我は世に勝てり〉というまで勝ち気の幻想をする。

もしあなたが神の賜物のことを知り、また「水を飲ませてくれ」と言つた者が、だれであるかを知っていたならば、あなたの方から願ひ出て、その人から生ける水をもらつたことであろう。(四一〇)で、渡辺正雄氏は次のように言う。

水を汲みに来るのは女の人の仕事であつた。彼らはふつう、夕方にそれをするのであるが、人々から見下げられていたこの女は、女たちが来る夕方を避けて、真昼間に水を汲みに来たのであろう。イエスは女に言われた、「あなたの夫を呼びに行つて、ここに連

れてきなさい」。女は答えて言つた、「わたしには夫はありません。」(四一六〜20)

〈人々から見下げられていた〉(寡婦)に尽きることのない〈活水〉が流れてくる。多分、文脈というのはこうあつて、それは心というものが持つ水脈なのである。

〈死〉は極度の定位だから、それは〈心〉であるものに似ている。人ということの、意識の方向が心だから、極点は人の成立、かつてなかつたものの創造である。死は心と同位置にあつて人に似ている。心のリアリティは考えること、言葉を記すことであるが、奇跡と同様、私には復活は考えることにならない。死は心の働きたから、共れないものに似ていて、ないものは神に似ている。もう一回ヨハネ、

よくよくあなたに言つておく、だれでも新しく生まれなければ神の国を見ることはできない。(三一三)

よくよくあなたに言つておく、だれでも、水と霊から生まれなければ神の国にはいることはできない。肉から生まれる者は肉であり、霊から生まれる者は霊である。あなたがたは新しく生まれなければならぬと、わたしが言つたからとて、不思議に思うには及ばない。風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞くが、それがどこからきて、どこへ行くかは知らない。霊から生まれる者もみな、それと同じである。(三一五〜8)

ないとしか思つていなかったものがある。心の底が姿を現わしてものに気づくことがある。〈新しく生れる〉とは、当然死ぬことである。それは心の行きついた所と同地点、存在しない所である。心と神の国は似ている。そして〈霊から生れる者は霊である〉という

のは、肉(体)、この世の相対性が存在しない所、目には見えない所。いわば、そこは心という、人の場所。心、考えることが人のリアリティなのであろう。即ち(霊によって生れる)、肉体として実在する人がまたいるわけで、死んで後にいるわけである。それを心という風に言ってみる。心はこの世に生まれ出るのではなく、必ずこの世からの死として(存在する)。

気がつくのは、ある(時間・空間)の中で、気づくことそれ自体。ロゴスが肉になったという。あるいは肉がロゴスになったのかも知れない。先の場合、この世の言葉をキリストが話し、後の場合は人がロゴスになろうとしてムリをしている。ムリをしてもロゴスにつながっているような言葉の場所があるのではないか。

十一-28 「わたしが復活だ、そして命だ、わたしを信じている者は死んでも生きている」。

こうしてイエスは人間が考えている生を天上の領域におかれた。

(中 175)

というが、(死んでも生きている)のは「天上の領域」よりも、死という極度の定点なのではないか。そこは政治社会にはない所である。そことロゴスがつながっている。生きの果てまで行ったら見えてくるもの、心。

十二-8 貧乏な人はいつもあなたたちと一緒にいるが、わたしはいつも一緒にいるわけではないのだから。

貧乏な人に施しをすることは、人間の意志だけができることができる。この世の善行である。しかしマリアの行為は、カヤバと同じように、自分が意識せずに行つたのであって、神の預言を示したのである。(中 199)

マグダラのマリアが(意識せずに行つた)のはロゴスとつながっていたから。死という心に存在していたから。

十一-53 そこで彼らはその日以来、イエスを殺す決意をしていた。十二-10 そこで大祭司連はラザロをも殺す決意をした。

という、その死にすること、この世の相対性で、そこにいること。マグダラのマリアもそこにいて、(心)が預言にひとしかった。

なに、思考、言葉は最初から神への筋道のようにあつたから、この世の充実は(逆)のようであつた。人生から、その相対性のすべてを味わいつくすような、話す言葉がすべて(正しい)ような、そんな所に私はいない。ただ極度の被虐の定点にいるから、私は(正しい)ことを知らず、知っているのは屈辱と悲しみだけ。

(富んでいる者が神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通る方が、もつとやさしい)(マタイ)。それを知っているのが(心)。

(あなたがた貧しい人たちは、さいわいだ。神の国はあなたがたのものである)(ルカ 六-10)とはつきりしている。貧しい人(政治の構造)は「神の国」の住民だと。二千年の間、人は余りに、その政治の中で聖書の解釈をしつづけた。

貧しさという人間の極度の位置からの言葉は、やはり死をしかもたらさない。キリストがそう生きた。この世に助かる死はない。

ひとりという極度の位置と死までの間には、奇妙な時空があつて、そこにはなにかの空気が充ちている。そこで言葉がロゴスに変化する。それはこの世に許容されない言葉で、この世に逆戻りできない。あるいはこの世の言葉と引き換えに成立するロゴスである。(言葉)は必ずこの世の悲劇性をもって表現される。栄光の奇跡などが文脈になつてくることはない。文脈の力といつてみて、それがロゴスカ

も知れない。ロゴスだけが言葉を支えている。

人間に芸術があるのは、そこから代金を引くためだろうし、人間に言葉があるのは、そこから他人の評価(説明)を引くためだろう。

五

一七―25 正しいお父様、この世はあなたを知りませんでした。しかもわたしはあなたを知っており、この人たちもあなたがわたしを遣わされたことを知りました。

〈心〉と「正しいお父様」はひとしい。

一五―18 もしこの世があなたたちを憎んだなら、あなたたちより先にわたしを憎んだことを思え。

この世は極度に定位する心を憎む。歴史は被虐の極地に憎悪という気づき方をする。

弟子たちには、イエスの友人としての本質がそなえられたから、

この世は排斥するのである。(下 108)

一五―19 もしあなたたちがこの世のものであったら、この世は自分のものを愛するはずである。しかしあなたたちはこの世のものでなく、わたしがこの世から選び出したのだから、この世はあなたたちを憎むのである。

心、〈死の共同体〉の故に。

この世は愛の本質を知らず、愛でないものを愛と考える。この世には神の愛は存在しない。そのためこの世では神の愛とはちがった物差で愛を測る(下 108)

この世は死ぬことのない伝統と歴史である。その被虐の極点心が

であれば、この世には思うことも話すことも不可能らしい。考えること、語ることが愛の性質なら、それは憎まれてしか存在しえない。

(まことに、まことに、これは奴隷の思い、貧者の心である)

一五―23 わたしを憎む者は父上をも憎むものである。

(まことに、わたし的心とイエスと神は三位一体である)

一五―22 もしわたしが来て彼らに語らなかつたら、彼らに罪はなかつたが、今は、その罪の弁解はできない。

この世の行ないは罪である。(下 112)

というのは白井氏の言葉の究まりであるが、〈私の心〉にイエス(神)がやってきたのだろうか。私が歴史にいれば言葉には会わない。

24 しかし今、彼らはわたしを父上をも見て、しかも憎んだのである。

一六―2 彼らはあなたたちを礼拝堂追放するにちがいない。それどころか、あなたたちを殺す者が皆、神に奉仕しているかのよう

に思う時が来るであろう。そう歴史はこの世の正義であり、心を殺さない歴史など存在するわけではないから。

7 しかし本当のことを言うが、わたしが行くことは、あなたたちのために利益である。行かねば、パラクレイトスはあなたたちの所に来ないが、行けば、わたしが彼をあなたたちに遣わすからである。

心の成立が肉体の死なのである。この納得を神からのパラクレイトスというのであろう。

ここで世界的ドラマが考えられる。告訴人はパラクレイトス。訴えられているのはこの世。神の法廷で、訴訟はキリストとこの世

との間で行われる。最後の日に行われるのではない。イエスが父上の所に行かれた直後、歴史の中で行われる。ここでは罪のある個人の罪の証明を取り扱っているのではない。人間が意識して行う心のなかの事件ではない。信者にだけ示される天上の事実である。(下 128)

というが、それは〈心のなかの事件〉、即ち〈心〉でいいのではないか。「人間が意識して行う心」などという〈心〉はないから、心は極地なのであり、いわば「天上の事実である」。

この世しかないから、心という〈意識〉〈ひとり〉であるものは頂点のようにある。この前に広がるもの、そこから見えるものが、この世なのだろう。そこに関係するのが〈祈り〉というないものなのであろう。祈りがひとりを支えている。ひとりが在るといふ意味、人間という意味である。

六

一六一 12 まだたくさん言うことがあるが、あなたたちはいま(神の秘密に)耐える力がない。

心は極点だから「あなたたち」(複数)に適応することはない。この世の人はいつだって〈神の秘密〉に耐えることはできないし、また一人は歴史には現れない。人が〈ないもの〉(神)を確信できるとすれば、その人自身が〈ないもの〉にいる時だけである。

一六一 32 見ていなさい。みんなちりぢりになって自分の家にかえり、わたしを独りぼっちにする時がくるから。いや、もう来ている。しかしわたしは独りぼっちではない。父上と一緒にいてくだ

さるのだから。

〈ひとりぼっち〉の〈わたし〉は父上と一緒である。

一四一 16 イエスは言われる、「わたしは道である、また真理であり、命である。わたしを通らずには、だれも父上の所に行くことはできない。」

「真理」とは、この世の知識のように簡単には発見することができない。(下 177)

〈わたしは道である〉のは、極度の心が人間だからであろう。〈心〉(真理)〈生命〉は〈私というひとり〉にひとしい。

一四一 17 これは真理の霊である。この世はこれを受け入れることができない。それを見ないし、知らないからである。(しかし)あなたたちはそれを知る。いつもあなたたちのところを離れず、また、あなたたちのなかにいるのだから。

この世は真理の霊を受け入れることができない。というのは不信者は信仰に入ることができないというのではない。共同体とこの世とは本質的にちがうことを言うのである。

というと簡明である。真理の霊とは疎外された極度の心だから。一八一 33 そこでピラトはまた総督官舎に入り、イエスを呼びよせて言った。「お前がユダヤ人の王か」。

36 イエスが答えられた、「わたしの王国はこの世のものではない」。

イエスがわたしの王国についてピラトに説明された主旨は、わたしの王国はピラトが考え、ユダヤ人が考えているものとはまったくちがうこと、この世に生きている人々には理解できない国。ここでは神が支配され、神が生きておられるようにその国も果てし

なく続く。もはやローマの国やユダヤ人を相手どつて戦うような、この世に属する国ではない、と語られた。(下 238)

37 そこでピラトが言った、「では、やつぱりお前は王ではないか」。イエスが答えられた。そうだ、あなたは正しい。わたしは王なのだ。わたしは真理について証明するために生まれ、またそのために世に來たのである。真理から出た者はだれでもわたしの声に耳を傾ける」。

極度の場合が真理であれば、対してこの世は虚偽であろう。(我勝てり) というのは、この世が勝つことの性質であつたことを示す。

〔真理について証明する〕とは、神の實在をこの世に働かせて、人々に知らせることである。神とこの世との大きな法廷で起るすべての出来事について、イエスが義であり、この世が誤りであることを現すため、すなわち裁きのために彼は世に來たのであつた。イエスの証明は同時に、この世に対する警告である。(下 240)

とまたしても二元論である。(神の實在をこの世に働かせる) ことが心というものではないか。それにしても「この世が誤りであつたら、日本などその特徴かも知れない。(高橋たか子風に)

キリストが処刑されるまでは社会的現象としてもわかる。そして死、その死を生きていると、ここから(真理)になることがわかる。対してこの世は虚偽。

神は六日間でこの世を創造し、七日目を休息日とした。次は八日目、洗礼(新生)は八角堂で。極点の次が新生(真理)なのである。極点が真理の王国であれば、多分、人間はここを定位としたら、ここを動かうとはしないだろうし、小説、仮空の人間を作つてみる

こともしないだろう。ここはそれほど魅力のある場所で、この極地以外では人は(考える)ことも、(話す)こともできない。それが極地という定位なのである。(定位)という、人の居る場所。それは歴史という(存在理由なるもの)によつて、人類の構造そのものによつて作られているもの(極点)、疎外のひとりがいる場所。

快感である狂気。生きる方法のない、生きている場所。(場所)というのは社会の構造と私ひとりの関係。あるいは複雑極まる社会構造。(ないひとり)というのは神に似ている。と共に生きている限り、この定位置は、不幸であり、この世の地獄みたいな場所。

七

「しかし神的なものは、非常に人間的な状況において自己として目に見えるようになる。」(『ギルガメシュの探求』クルーガー)

「旧・新約聖書の、聖者たちは、ただひとつの同一の聖霊のインスピレイションのもとに、語つた(書いた)。唯一・絶対の神こそ、旧・新約聖書の著者である。」(一四四二、フロレンス公會議)

「ただひとつの同一の聖霊のインスピレイション」というのは、極度の定點・心と違ふのだろうか。

「カール・ラーナーという、二〇世紀が生んだ最もすぐれた聖書解釈学者神学者のひとりには Eberhard を起源の語におきかえて、「神が全聖書の著者である」とは、「全聖書の全文の、それあつてこそ存在可能となつた源が神である」と言っている。」

(犬養道子『聖書を旅する』2)
(それあつてこそ可能となつた源)とは、心、極度の定位のこと

ではないか。だから聖書でなくても、言葉という神への筋道は創造である。いつでもそうである。文脈というのは、〈言葉の息〉のつながり。つながらない文脈はない。右の『聖書を旅する』十巻の長さ、それがまた犬養道子の〈それあつてこそ〉存在する文脈である。

白いブラウスからムシ、ムシ、ムシと追ってくる恐怖。

教室の何処からもムシ、ムシ、ムシと追ってくる恐怖。

建物全部からムシ、ムシ、ムシと追ってくる恐怖。

うづくまるゲッセマネ、どんな場所も恐怖を含まない場所はない。どうなってしまったのだろう。一九九六、五、日本。狭い日本。こ

こには優しい木を移し植えてみることはできない。